

「仏が歩み行かれるところは、一中略一武器をとって争うこともなくなる」これは、浄土三部経の一つ、「仏説無量寿経」の一節です。

浄土三部経とは、阿弥陀仏の極楽浄土が説かれているお経です。その中でも、「仏説無量寿経」は、すべてのいのちを救わんとする願い（本願）が説かれているお経です。

ここで仏とは、目覚めた人のことです。歩み行かれるということ、一歩ずつ歩まれ、一人ひとりに遇われるということ、そしてそこにおいては、武器をとって争うこともなくなるということ、です。

人は目覚めた人に遇わないと、武器をとって争うことになるかもしれませんが。もとも争いは何故おこるのでしょうか。

ここで二つ確かめたいと思います。一つは、見の濁りです。見とは、意見・見解の意です。濁りとは本当のことが見えない状況のことです。私または私たちが本当のことを見ずに濁ってしまうとき、私または私たちの意見・見解のみが正しいとする立場に立つでしょう。そしてその延長線上に武力に頼る行為が起こるのでしょう。

二つ目は煩惱による濁りです。己の欲望を満たしたいという煩惱が強くなって、自らを制御出来ない状況に陥る時、周りが見えなくなり、知らず知らずのうちに、他者からいろいろなものを奪い、そのいのちや生活の場を傷付けていくことになるでしょう。直接武器を取らなくても、それに等しい結果になっていると思われ

ます。

「武器をとって争うこともなくなる」ということは、如何にして実現するのでしょうか。「仏説無量寿経」には、また次のように説かれています。

「仏が歩み行かれるところは、その教えに導かれないところはない。」

また、「人々は徳を尊び、思いやりの心を持ち、あつく礼儀を重んじ、

互いに譲りあうのである。」

その教えとは、真実を見る智慧をさします。教えにより、われもひととも、ともに同じいのちをいただいているお互いであるということに目覚めるのです。

私は人々と真実出遇っているか、思いやりの心を持ち、人の生き方を尊重し、いろいろなものについて譲って生きているのか、振り返らなければならぬことです。

